山へ逃げよ

福元　希高

象の話をしよう。

記述によれば、江戸時代までに、我が国に象が渡来したのは計七回とある。

先ず、最初の渡来は応永十五年（一四〇八）若狭国に南蛮船が上陸。乗船していたのは亜烈（あら）進卿（じん）と従者たち。南蛮国から日本に向け出航、暴風雨に遭い若狭湾に漂着した。船には象一頭、原産馬数頭、他に孔雀、鸚鵡も乗せていた。

日本国王に献上して、通商を願い出る目的だったようである。

一行が若狭を出て京まで一か月。室町幕府第四代将軍足利義持に謁見して献上した。

当時の幕府は財政困窮が実情、象には大量の餌などを必要とするため、すぐに飼育困難に陥った。やがて三年後、隣国の朝鮮国王に寄贈された。

二番目の渡来は、天正二年（一五七四）明国商人が博多に運んできた。目的は不明。

三番目の渡来は翌年、天正三年（一五七五）南蛮国より豊後国大友氏に、象、虎、孔雀、鸚鵡が寄贈されている。

四番目の渡来は慶長二年（一五九七）呂宋国マニラ総督から豊臣秀吉に寄贈された。西国艦隊が呂宋から平戸まで運んできたという。それは安南国の象であった。平戸から京まで陸路で運ばれ、聚楽第に届けられたという記録が残されている。

太閤秀吉に贈られて、大御所家康に贈られぬことはない。当然家康にも象が贈られていた。これが五番目の渡来、慶長七年（一六〇二）安南国より献上される。陸路の記録が無いのでたぶん船で運ばれたのであろう。関ヶ原役の直後辺りなので駿府城にでも搬入したのか、記録が存在しない。

そして六番目の渡来。この時の渡来象が一番記録に記されている。

享保十三年（一七二八）明国商人が、江戸幕府第八代将軍徳川吉宗に献上するため、安南象雄雌二頭を長崎に運んできた。到着後、雌象は残念ながら三か月で死亡。雄象だけこの年三月から二か月かけて、長崎から遥々江戸まで陸路で旅をする。

関門海峡を船で渡った以外、旅程は全て陸路の移動であった。京に到着したとき、天皇に謁見という名誉な機会が与えられた。しかし、宮中にて拝謁ともなれば、然るべき身分がなくては参内できない。そこで考えついたのが、象に位階を与えることであった。かくして前代未聞の「広南従四位白象」という位階と名が授けられた。従四位といえば諸大名の上位、幕閣では老中級の位である。御所に上った象は目出度く中御門天皇に謁見することができた。

天覧を無事に終えて、東に出発。難関箱根峠を越え江戸に入った象は、浜御殿（浜離宮）に入る。そして将軍吉宗と拝謁。上覧後、特別に設営された飼育所で十二年生きたという。

七番目の渡来は幕末、文久三年（一八六三）見世物として商人が運び入れたとある。因

みにこれらの象は、全て東洋に生息する種類である。七回に亘る渡来象の歴史であるが、実はこのほかに、ある事情で記述されない一件があった。記録に残さず、歴史の闇に葬る、そうせざるを得ぬ出来事があった。それが本編の延享神象事件である。

時は江戸中期。延享二年。

享保の改革を断行し、幕府の財政を立て直して、中興の祖と言われた第八代将軍徳川吉宗は、嫡男家重に将軍職を譲位して大御所（将軍隠居の尊称）となった。

江戸幕府第九代征夷大将軍に就任した徳川家重は、朝廷より将軍宣下を受けてのち、江戸城にて親藩、譜代、外様など、天下六十余州の諸大名から就任祝辞を受ける。

多忙を極める新将軍は小柄であった。幼い時分に脳障害で顔面が麻痺、そのため顔が歪み、異相であった。初対面の諸侯たちは異様な顔つきに戸惑いを見せ、家臣たちも対応が難しく、早急に対策を迫られていた。

近習たちが一番困り果てたのは、家重が発する言語であった。脳の病による生来虚弱の挙句に言語障害。不明瞭な言葉に悩まされていた。

家重の将軍職譲位を巡っては、過去にこんなことがあった。

父吉宗の代、時の老中松平乗邑は、切腹を覚悟で家重の廃嫡を進言、

「家重様には、誠にお気の毒な境遇、上様のご胸中お察しいたしまする。さはさりながら、将軍職は激務にござります。強靭なる心、体、これなくして務まりませぬ。故に家重様にはお務め候はず」

松平乗邑は、吉宗の次男、聡明で文武に長じた宗武に譲位するよう上奏した。

熟考を重ねた吉宗は、過去の三代将軍家光と駿河大納言忠長の兄弟家督争いの悪しき例を鑑（かんが）み、

「東照神君家康公は、御遺訓として長幼の序を説かれた。よって、すまじきは御家騒動。廃嫡はならず」

と号令し、家重の廃嫡は却下された。

将軍譲位に執念を燃やす宗武は、兄家重の欠点を論（あげつら）って上申するが、吉宗の怒りを買い、三年間の登城禁止処分を受けた。宗武を担いだ老中松平乗邑は罷免となり、廃嫡事件は落着した。

吉宗は新将軍のために御側用人制を復活させた。

嘗て吉宗は、前将軍家継が幼君のため、御側用人として間部詮房、新井白石が台頭し、暴政を布（し）いたことを嫌い、自分が将軍職を継いだとき、その御側用人制を廃止したのであ

った。
大御所となった吉宗は、幕政の実権は渡さず、陰ながら言語障害を持つ家重を支え続けた。家重の言葉が不明瞭で、家臣に伝達困難の中、近習で唯一人家重の言語を聞き取り瞬時に理解できる大岡忠光を抜擢、御側用人に任命した。
大岡忠光は将軍家重の言語伝達の第一人者として、朝廷特使の饗応接待、諸大名謁見の際、大活躍を見せ、その功により従五位下、出雲守に叙任された。
忠光は、将軍吉宗時代に名奉行として名を馳せた大岡越前守忠相とは、共に大岡忠吉の子孫に当たり、親交を深める間柄であった。将軍御側用人、若年寄として幕府の要職を務める忠光は、近習時代の先輩で切れ者の誉れ高い田沼意次を、是非とも老中に迎えるよう進言した。それを受けた家重の下命にて、ここに田沼侍従意次が老中に昇任し、盤石の幕政が布かれたのであった
幕閣の苦労は並大抵ではなかった。家重は言語障害だけではなかったのだ。頻尿である。あまりにも頻繁に尿意を催すせいで、上野寛永寺参詣のときは、道中二十三か所に便所を設置させて、排尿に備えたとある。それが世間に知れ渡り、小便公方と揶揄される始末であった。
それでも家重は、己の発話の難を瞬時に聞き取り、意のままに伝える忠光のお蔭で、恙（つつが）なく将軍責務を果たすことができた。この時から家重の意を伝える忠光の行いを、御意仲介（おんいちゅうかい）と称するようになった。

江戸城本丸奥院にて寛ぐ家重に、御側用人忠光と老中筆頭田沼意次がそれぞれ労いの言葉を述べた。家重が忠光に向かい、
「……」
と話しかけた。
近くにて言上を聞き取る忠光。
「上様、御意。朝廷の特使も京に帰られ、諸侯の謁見も本日にて、全て終えましてござります」
忠光の御意仲介である。聞いた田沼意次が、
「いかにも、ご苦労にござりました。あとは長崎出島よりオランダ商館長が、国使として参上。そして隣国の明、朝鮮の使者が密かに参ろうかと」
意次はオランダ国以外、鎖国制度を布く公儀を慮（おもんぱか）って用心深く言葉を述べた。
「左様でござります。オランダ以外は隠密裏に」
忠光がそれに応じる。

老中田沼意次の政（まつりごと）は先代吉宗公の幕府財政再建策、享保の改革、倹約令を継承することにあった。家重もそれに同意し、意次と忠光は共に公儀の名の下に、奢汰を禁じ、節約を奨励し、秩序の維持を目的とし、それに邁進した。

将軍宣下、就任儀式を終えてのち、長崎からオランダ船が品川沖に姿を現した。上船していたのは長崎出島オランダ商館長。国使として江戸城に上り家重に拝謁した。

異人の使者から将軍就任祝辞を受けて、家重は丁重に返礼の言葉を述べた。勿論忠光の御意仲介による伝言である。

「此度の江戸出向、誠に大義である。オランダ国王陛下に厚く御礼申し上げる。貴国の益々の繁栄を願うとお伝えあれ」

和やかな雰囲気でひとしきり談笑の後、家重が奇妙な話を切り出した。これからは全て忠光の口を借りての御意仲介である。

「父吉宗公のとき、隣国より東洋の象が贈られた。余はまだ幼かったが、父上に連れられて浜御殿に参り、初めて大きな象を見た。あのときの事、今でも思い出す。やがてその象は衰弱して死んだと聞かされた」

家重の言葉は続く、

「国使に訊ねる。御国は大国と聞く。その偉大なる力で、世界の大陸あちこちに、支配する領土があると聞いておる。誠であるか」

「上様に言上いたします。大国は我がオランダだけではありません。スペイン、イギリスなども大国です。それらの力を持つ国々が、数ある大陸を分け合って支配しております」

「で、あるか。ならば話を続けよう。国使よ、遠き南方に暗黒大陸と呼ばれる途方もなく広い大陸ありと聞く」

「よくご存じで」

「これまで我が国に渡来したのは、暹羅（しゃむ）や安南（あんなん）の、東洋に生息する象であった。聞くところによると、南方の暗黒大陸に棲む象は、東洋のとは比べられぬほど巨大であるという。牙も鋭く長く、獰猛であると聞く。余はそれが見たい」

家重の言葉が熱を帯びてきた。

「いや、見たいだけで申すに非ず。親孝行だ、今度は余が父上に南洋の象をお見せしたい。父上がご壮健の内に是非とも御覧頂きたい。そして天子様にも御覧に供したい。それが徳川の朝廷への忠義の証。天下に忠誠心を知らしめたい。そう願っておる」

将軍家重の熱弁を受けて、

「御言葉、承りました。上様の御心、その願いが叶いますよう、早速発ち帰り本国に伝えまする。暫しのご猶予をお願い奉ります」

国使は恭しく拝礼し、下がっていった。

すべての儀式を終え、老中の間に戻った意次は、共に下がった忠光とどっかり座り、深

い溜息をついた。
「やれやれ、またしても象か。あれは金がかかる。飼育の大変さを上様はご存じない」
「御意。就任早々反論は許されませぬ。弱りましたな。公方上覧、のち京まで運んで天覧催事となれば、大掛かり、途方もなく費用がかかります。この財政逼迫の折、それを行えば享保以来の改革、倹約令も吹っ飛んでしまいます」
「申される通りである」
「また、宮中参内となれば、象に位階と名を奏請せねばなりませぬ。これは厄介なことです」
忠光が意次の顔を窺うように、
「大御所様にお知らせ申し上げ、ご意向を伺うということでは」
「あいや、就任早々それはならぬ。上様のご体面を考えてみよ」
「では御老中には、いかがなされましょうや」
「知れたこと、象の天覧催事はあり得ぬ」
「それはどういうことでござる」
「象は公方上覧までだ。その先はいずれ話す」
老中田沼意次はそのあと一言も発しなかった。

江戸城西ノ丸大御所の居館。
大御所吉宗は、隠居してからも家重の言語障害など心配事も多く、ために幕政の実権を維持し、隠然たる勢威を保っていた。しかし、新将軍を引き立てるため主だった介入は控え、日々書を読み、侘び茶に勤しみ、花鳥風月を愛で、質素に過ごしていた。
その吉宗の下に、家重がオランダ国に象を要求した件が報告されたのは、国使が帰った三か月後であった。
「なんと、暗黒大陸の象だと。それをオランダに注文したと申すか」
吉宗が驚きの声を上げた。
「この財政逼迫の折、あやつは何を考えておる。象一頭飼うのがどれくらい大変なことか、あやつはそれを知らぬ。老中はなにをしておった。なぜそのような大事をもっと早くに知らせなんだ」
激怒する吉宗。すぐに吉宗の前に老中田沼意次が召し出された。ひたすら全ての責めは我に有りと謝る意次。
「長崎に断りの早馬を出しても、もう遅いは。商館長はとっくに本国に使者を出しておろう」
座りなおした吉宗は落ち着きを取り戻した。
「あの阿呆、南方の象を天覧に供し、徳川の帝への忠誠を天下に知らしめると申すか。新将軍は親孝行のつもりであるか」
平伏する意次を見やりながら、吉宗は苦笑いした。

近くに控える側近たちは、吉宗の怒り、呆れ、そして喜ぶ様子を理解できずにいた。
「もうよい。就任直後だ、その方ら幕閣が反論できぬは無理からぬこと。余もあれこれ口を挟むことは控えよう。将軍上覧のあとだな。全ては」
大御所吉宗は、老中田沼意次と同じようなことを口にした。

それから二年の歳月が流れた。
公儀の下に長崎奉行から伝達がもたらされた。
出島オランダ商館長からの報告で、近々長崎に、オランダ船にて暗黒大陸の象が一頭運ばれてくるという。それは先に入国した新任商館員からの報告であった。聞くところによると、オランダは、大陸に広大な支配領を持つイギリスと交渉し、象を一頭手に入れ、日本に向かって出航したとのこと。長崎に到着後、公儀大型御用船に乗り換え江戸に参上との報告であった。
御側用人忠光より知らせを受けた家重は、
「誠か、来るか。嬉しいぞや。父上のお喜びの顔が浮かぶぞ。天子様もさぞや、お喜びあそばされようぞ」
飛び上がらんばかりの喜びようであった。御側に侍る意次と忠光は、目を合わせ、家重に対して追従笑いをするのみであった。

待ちに待った日。品川港にオランダ寄贈の象を乗せた公儀大型御用船が着岸した。
いよいよ暗黒大陸の象が、その巨大な姿を現した。これまでの東洋産の象とは桁違い、遥かに巨大で、足も太く、長い鼻、反り返った恐ろしげな牙、その肌の色は白色を帯びていた。そして異様なことに、巨象の広い額には、長く、太い、十字の皺が刻まれていた。
初めて見る公儀役人たちはその巨大さに驚愕し、声を上げた。
長崎出島からの随行員は二人。一人はオランダ商館員で通弁役。もう一人は、肌の黒い少年。少年は暗黒大陸から象と共に送られてきた象使いであった。通弁役のオランダ人は、黒人少年のことをヨサムと呼んでいた。
象一行は、嘗て吉宗時代に安南象が飼育されていた浜御殿に入っていった。そこはすでに、この日のため見事に改築されていた。象と、象使いの黒人少年ヨサムは、すぐに新しい飼育場を気に入ったようである。
象を巡る体制が整った頃を見計らい、公方上覧の催事となった。
江戸城を発し、浜御殿までの道のり、家重排尿のため各所に設けられた専用便所。この頃、家重の頻尿は益々度を超すのであった。
浜御殿内に赴いた将軍家重と、南洋渡来象との初対面。
巨大象を見上げて上機嫌の家重。対する象の傍にぴったり寄り添う象使いヨサム。並んで跪（ひざまず）くオランダ通弁役。

家重は動かず、じっとその巨象の双眼を見つめた。と、一瞬、象の目が光ったように感じた。同時に、家重の身体の中心から熱がこみ上げてきた。呆然と立ち尽くす家重を、傍で見る忠光が、

「上様、いかがあそばされましたか」

と声をかけた。

「うむ、大事ない。オランダ商館より随行の者、遠路大儀であった。象使いの者、余は黒人を見るのは初めてである」

オランダ通弁役が、

「何分、少年ゆえ、御無礼の段、お許し下さりませ」

「分かっておる。案ずるな。ヨサムと申すか、苦しゅうない」

家重は火照る身体を訝りながら、優しく少年に話しかけた。

「ヨサムよ、余は象に近づいて、どこぞの肌に触れてみたい。象の機嫌はいかに」

通弁役から話を聞いた少年は、にっこり微笑み、頷いて象の耳をそっと叩いた。すると白色がかった巨象が頭を下に向けた。周囲の者たちには象がお辞儀をしたように映った。

家重は恐る恐る象に近づき、そっと片手を伸ばして象の耳に触れようとした。その瞬間、象の鼻が動き、家重の背を優しく抱えたのであった。

「や、上様」

忠光が声を上げた。それを受け、血相変えて立ち上がる側近衆。

「大事ない、案ずるな」

家重が恐々（こわごわ）ながら側近たちを制した。

象使いヨサムが微笑みながら象の耳を優しく叩いた。象はゆっくり鼻を振って家重を解放した。心が和む仕儀であった。離れて元の位置に戻った家重も、安堵の表情を浮かべた。

「ヨサムとやら、でかした。褒美を取らすぞ」

家重は用意した褒美の品々を、オランダ通弁役、象使いヨサムにそれぞれ与え、上機嫌のうちに浜御殿をあとにした。

不思議な事が起きた。

帰路、浜御殿より江戸城までの道のり、家重はいつも頻繁に襲いくる尿意も感じず、各所に用意された便所は只の一度も使用することはなかった。

不思議な現象は続いた。その後数回、巨像に会いにくる家重に、少しずつ異変が起きた。先ずは頻尿が治まりつつある。そして、引き攣っていた顔の歪みが緩んで、僅かながらすっきりした面立ちになってきた。やがて顔と口元の歪みが矯正されていくのが傍目にも分かった。驚いたことに、あれほど難解だった言語が、段々明瞭に聞き取れるようになってきた。

「摩訶不思議なり。白象の鼻で抱かれること幾たび、その都度、顔の引き攣りが薄らぎ、言葉が出し易くなった」

家重は嬉しさをはっきり口にできる自分に狂喜した。
「あれは神の成せる業。象は神の使い。正に神象なり。神象のお蔭で業病が癒えていくなり」
喜び、叫ぶ家重。
「なんと不思議なこと。上様、誠に祝着に存じます」
意次、忠光は共に祝いの言葉を述べた。
こののち、神象と銘打たれた暗黒大陸渡来象は、江戸市民たちにも公開されることになった。神の使い、神象の評判は上々、連日浜御殿内に見物客が押し掛け、行列が幾重にもなり、押すな押すなの大盛況。江戸市中、神象の話題で持ちきり、瓦版も撒かれ大騒ぎとなっていった。

ある夜。
江戸城田安門内にある御三卿、田安家。屋敷内奥ノ院。
当主田安宗武が正面に座している。
田安宗武は先の将軍吉宗の次男、現将軍家重の実弟である。吉宗の興した御三卿の筆頭、田安家の当主であるが、兄との将軍職後継争いに敗れ、三年間の登城禁止処分の身であった。静かに隠忍自重の日々を過ごしているかに見えるが、内に秘めた兄への闘争心、覇気は衰えず、捲土重来を期していた。
宗武の側に控えるのは、家老の堀田勘解由。宗武を次期将軍に担ぎ、敗れて老中を罷免された松平乗邑の肝いりで、他の重臣を押しのけて家宰にまで昇りつめた男。歴とした譜代の家臣ではなく、出自もはっきりせず、家中では胡散臭い人物のように思われている。
宗武の前方には、一人の人物が平伏している。
「神象とは片腹痛し。かえって世間の笑い者よ。小便公方の茶番である」
宗武が兄を悪しざまに罵った。
「御意。上様ご乱心のご様子。象はこの先、京に運び天覧催事とも、洩れ聞いております」
堀田勘解由が答える。
「笑止千万。無辜の民の嘆きが聞こえぬとみえる」
吐き捨てるように宗武が言う。
「噂では、宮中に入廷せず、然るべき場所に象の館を造営し、そこに帝をご案内仕る案もあるとか。いやはや、莫大な金がかかりますな」
「愚かな。たかが象ごときに、帝の御動座などあり得ようか。不忠義極まる行いぞ」
「仰せの通りにござります」
答えたあと、勘解由は宗武の前方に控える人物に声をかけた。
「梵天屋利左衛門、面を上げよ。聞いておるな」
「はは。利左衛門、お召しにより参上仕りました」
答えた男は歳がらみ古希を迎える老人であった。

勘解由が話す。
「本来ならば、暗愚な兄上より、聡明であらせられる宗武様が将軍になるべきであった。だが、まだ打つ手はある。事を起こして現将軍を失脚せしめ、宗武様が新将軍に就く。これが我らの悲願である」
「畏れながら御家老様、我ら商人に何をせよと」
梵天屋が顔を傾げながら訊ねた。
「象を殺せ」
勘解由が短く言葉を吐いた。梵天屋は無言で続きを待つ。
「利左衛門、その方とは長い付き合い。昔の誼みだ、好機到来ぞ。天覧に御する象を殺して、天下に公儀の恥を晒すのだ」
「御家老様、私は船問屋を商いとする者。何故にそのような話をされまするか」
「利左衛門、今更何を申す。その方が御法度の闇世界に通じる者であると、我が殿もご存じである。嘗ては儂もその世界を覗いた身。腹の探り合いは無用と知れ」
「これは、畏れいりました」
梵天屋利左衛門は苦笑いをして答えた。
「利左衛門、殿は徳川宗家の御血筋。よって御当家は迂闊には動けぬ。事は隠密裏に成さねばならぬ。そなたの力を借りたい。そなたの知る闇世界の者を遣ってな」
「御家老様、重ねてお訊ねします。確かに、その闇の者たちが象を殺すのは、いとた易きこと。さりながら、それが好機到来とは、私には解せませぬ」
「さらば聞け。帝より位階を受けんとする象、それを殺さば朝廷への反逆罪となる。公儀の失態は将軍の失態。徳川宗家は天下に恥を晒したことになる。現将軍は責任を取り退位、そうなると次将軍は弟君宗武様。さすれば梵天屋、その方らが望む海外との交易も、容易になるであろう」
「成程、我らに南蛮貿易をお認め下さると」
「いや、表立ってはできぬが、つまりはその方たちに限り、お目こぼしをしようということだ」
少し黙考したあと、利左衛門が答えた。
「梵天屋利左衛門、御錠畏まりました」
宗武は目を閉じ、二人のやり取りを静かに聞いていた。
夜、田安邸にての謀議は、まだまだ続くのであった。

江戸品川は、東海道の重要な宿場町であり、海も近いので港町としても大いに栄えている。自前の船を港に停泊している梵天屋利左衛門は、海辺の近くに屋敷を構えていた。
この利左衛門なる怪しい人物、表向きは御三家、御三卿にも出入りを許される御用商人。廻船問屋を営み、海運業として御用船に幟を立て、御三家、御三卿の物資を運搬する。裏では御禁制の海外交易で蓄財を成し、稼いだ金銀を財政困窮の諸大名に高利で貸し付ける。

口封じに幕閣にも金をばら撒く、裏社会の豪商であった。
その屋敷内、利左衛門の前に、同じくらいの年恰好の武士が座っていた。
「蛍火燐兵衛、よう参った。お主とも長い付き合いだの」
茶をすすりながら、利左衛門が話しかけた。
「梵天屋、いやさ、烏玉夜兵衛（ぬばたまやへえ）。世間とは違い、大繁盛で何よりだ」
「おい、その名は使うな」
「口が滑った、許せ」
「ま、ここではよいか。まだまだ。我らは共に、無念を晴らすまでは死ねぬ身ぞ」
「その通り。二度しくじったからの。よく生き延びたものだ」
「お主との出会いは張孔堂事件、あれは惜しまれる。紀州南竜公を巻き込んでの天下争乱の筈であった。仲間は全て獄門。無念なり」
「俺と夜兵衛を除いてな。危ない橋を渡ったものよ」
「由比正雪先生は読みを間違えられた」
利左衛門こと夜兵衛は、そう言ってまた茶をすする。
「二度目は天一坊事件。俺は天一坊改行が嫌いであった」
「俺もだ、燐兵衛。山内伊賀亮殿がいたから、悪事と知りつつ加担した」
「怪盗烏玉夜兵衛。上手く逃げ遂せて豪商梵天屋にすり替わるとは、大したものだ。本物の利左衛門は海の藻屑かの」
「人聞きが悪いぞ燐兵衛。ま、そんなところだ。命を削ってここまで来たのだ」
「悪事とて苦労が付き物か。いつか露見するぞ」
「ばれたらまた逃げるさ」
「徳川御三家、御三卿にも出入りする御用商人が、まさか我ら闇の世界の者とはのう。公儀役人の間抜け面が目に浮かぶは」
「そう言う燐兵衛、お主こそ闇の軍団の頭目ではないか。大物になったのう」
二人は御法度の裏社会、闇の軍団と呼ばれる盗賊団の一味であった。梵天屋利左衛門に成りすます烏玉夜兵衛。闇の軍団の頭領、蛍火燐兵衛。どちらも裏社会では名の知られた盗賊であった。
「ところで夜兵衛、俺たちはつまらぬことでは会わぬ約束。重用と言うので参ったのだ。話を聞こう」
「燐兵衛、お主は金には興味が無さそうだな」
「馬鹿を申せ。金はあるに越したことはない。それより世間を騒がす大仕事がしたい。幕府転覆は俺たち闇の軍団の本懐なり」
「言うたな、燐兵衛。では聞かそうか。此度はちと趣が異なるが、将軍実弟宗武公を担いで天下に悪戯をしようということだ」
「なんだ、宗武か。つまらぬ」

「そう言うな。憎き吉宗と倅の家重まで及ぶ話だ。慶安から享保までの積年の恨み、少しでも晴れるならやってもいいではないか」
「うむ。分かった、話を聞こう」
「宗武は聡明と言われるが、所詮は世間知らずのお殿様。煽てりゃ付けあがる、扱い易い男だ。徳川宗家を困らすには格好の獲物なのだ」
夜兵衛が続ける。
「それにな、尾張藩もいずれ巻き込む手筈になっておる」
「ほう、面白い。尾州か。夜兵衛、乗りかかった船だ。今宵はゆっくりと話を聞くとしよう」
「そうこなくてはな。では酒の支度をさせよう」
怪盗二人の会話は夜更けまで続いた。

浜御殿内。暗黒大陸から渡来した白い巨象は、時の公方が神象と言ったことで、さらに大評判となった。一般公開が無料とあって、連日見物客の長い列、押すな押すなの大盛況である。
その列の中に、笠を被り、襟に巻いた布を上げて顔を隠した、長身の男がいた。風体は農夫。それに連れ添う二人の男女。いずれも質素な身なり。笠を被った男は若い働き盛りの百姓に見える。連れの二人はまだ少年と少女。外目には、目立たぬ地味な百姓の子供たち。長身の男にしっかり付き従っているようだ。
三人は行列に倣いゆっくり先を進み、漸く白い巨象を見ることができた。流れに沿って歩み、やがて列を離れ、浜御殿から出た三人は、無言で足早に去っていった。

駿河の国。雄大な霊山、富士の裾野。御殿場と言われる広大な土地。
その高原の片隅に小さな古刹があった。一見寂れた寺ではあるが、よく見ると人が出入りする様子が窺える。寺内本堂に三人の人影があった。先日巨象見物のため浜御殿に現れた長身の男と少年、少女である。
「涛吾（とうご）、汀（みぎわ）、見たであろう。神象の眉間」
「見ました、ルシアン様。くっきりと十字架が刻まれておりました」
ルシアンと呼ばれた青年、眼の窪んだ彫りの深い精悍な顔立ち。日焼けした全身からは力が漲っているようだ。彼にはひと目で分かる特徴があった。銀髪である。銀に光る艶やかな髪を、無造作に後ろで束ねていた。異様な髪の色と、名から察するに、どうやら異国人の血が混じっているようである。
「主のお告げがあった。この地に神の使い、白き象が現れる。眉間に十字架がその証であると」
「神の使い。私は信じます」

涛吾と呼ばれた少年が答えた。
「我らは、神の使い、神象をお守りせねばならぬ。禁教令の名の下に、我々を弾圧し、排除する邪悪なる者たちから」
ルシアンは大きく両手を広げた。
「涛吾、汀、そなたら兄妹は主に命を捧げよ。そなたたちの一族、島原で散りし父、母、兄弟、子供たち、彼等の魂は癒えることなくこの世に彷徨っている。神象をお守りし、神象の霊力をもって、彷徨える魂を、安らかに天に召され奉らん」
万年雪を戴く富士山。その麓、御殿場にひっそりと佇む小さな古寺。それは一見、どこにでもある仏教の一宗派の寺。だが実際は、南蛮寺と呼ばれる天主教の教会。即ち御禁制の切支丹の隠れ寺であった。どこをどう探しても寺内には、教会、教典らしきものは無く、隠れ切支丹の痕跡はなかった。仮に信者以外の者が訪れても、普通の仏教寺としか思えないのである。
ルシアンは、切支丹伴天連と信者の娘との間に生まれた不義の混血児であった。隠し子として密かに育てられ、禁教弾圧の中ようよう生き延び、この教会で伴天連として布教に務めている。
涛吾、汀と呼ばれた兄妹は同年十五才。二人は双生児であった。兄の涛吾は凛々しい顔つき、いかにも利発そうである。妹の汀は、目元涼しく、清楚で気品があり、細身ながら中々の美形。
「涛吾よ、神象を見た汀は、どのように感じたか、お前の口から教えてくれ」
「ルシアン様、汀は私にまだ何も話しません。ただ何かを感じ取ったのは、兄の私には分かります」
「お前たちは、天から授かった不思議な感性と、特殊な能力を備えている。何か感じることがあれば知らせよ」
「汀はおそらく、神象に触れるか、眼を合わせれば、その心が読めるものと思います。私が気になったのは、象と共にいる黒人少年です」
「象使いか、あの者に何か感ずることがあるのか」
「お互い異人同士ではありますが、言葉ではなく、心の奥で何かを訴えているように感じました。汀ならすでに伝わっているかも知れません」
「時間をかけて汀から感じたものを聞きだしてくれ。汀の心はお前にしか伝わらぬ。頼むぞ。私は神象をお守りする手立てを考えることにする」
兄の傍に立つ汀。彼女は二人の会話を只じっと聞くばかりで、一言も言葉を発することはなかった。

江戸城本丸内。
巨象に会いに行き、その肌に触れる度に変化を感じ、持病が好転する家重は、日々上機嫌である。頻尿も快方に向かい、言語もた易く口に出るような気配に、心が踊るようであ

った。
「上様にはご機嫌麗しく、恐悦至極にござります」
意次がにこにこ挨拶を言上すると、
「意次、神象のお蔭だ。あの神通力で余は持病が見違えるように良くなったぞ」
まだ所々、忠光の御意仲介が必要ながら、家重の顔は晴ればれとし、立ち居振る舞いも毅然として見える。
そんな時、火急の知らせが入った。大御所吉宗が居する西ノ丸からの報告である。
少し前から体調を崩し臥せっていた吉宗だが、容体急変、危篤に陥ったとのことであった。家重は仰天し、老中、御側用人、側近を引連れ急ぎ西ノ丸に向かった。
寝所の床に眠る吉宗。家重は枕元に座り、御典医から容態を聞く。暫くすると吉宗が目を開いた。我が手を取る家重に気づき、
「家重か、見舞い大儀」
と、か細い声を出した。
すぐさま、忠光が側より家重の御意仲介を取る。
「父上、お気がつかれましたか。家重、父上のために神象をこの江戸に運んでおります。お身体落ち着きました折、是非とも御覧下さりませ。きっと病も快復されると思います」
吉宗の顔が険しくなった。
「家重、それよ、その象。天覧に供すること、罷りならぬ」
かすれる声だが、強い調子で吉宗が話す。
「え、何故でございますか」
「莫大な費用がかかるのだ。それを成すときは、幕府が破産するものと心得よ。よいか、家重、重ねて申す。帝に御覧あそばすこと、到底出来ぬものと思え」
「分かりました。天覧催事は諦めます。なれど父上、あの象には神通力があるのです。実はこの家重、象のお蔭で幼少より苦しんできた病が癒えつつあります」
「家重、あの象はオランダに礼を尽くして返すのだ」
「それは困ります。私の病のこともあります」
「ならぬ。父の遺言である。象は即刻オランダに返すこと。意次はおるか」
「はは、お側に控えております」
意次が答えた。
「意次、一同にも伝えよ。象は返すのだ」
「御下命、承って候」
老中田沼意次の声が、静まり返った寝所に凛と響いた。

大御所病気見舞いを終えて下がってきた意次と忠光。老中の間でしばし話し合いの時を持った。
「御老中、象の件、天覧は無しと決まりましたな」

「言を憚るが、祝着である。大御所様はこの儂と同じ考えをお持ちでござった」
「オランダに返すことにござるな」
「左様。飼育には莫大な費用がかかる。南洋の生き物は、この国での生息は困難である。餌の種類が違う。似た餌を集めるのにどんなに苦労が多いことか。しかも衰弱して最期はあっけなく死ぬ」
「そうは申しても、将軍宣下の直後、いかなる者も反対はできませんでした」
「いかにも。今からでも遅くはない。長崎奉行より出島のオランダ商館長に話を通すとしよう」
「天下に恥を晒すことになりませぬか」
「なに、恥は一時で済む。世間の笑い物になってもな。古来時が薬と申す。ははは」
哄笑する意次。切れ者らしくその顔は自信に満ちていた。

一度気を取り戻した大御所吉宗を見て、家重はじめ幕閣、側近たちは、ひとまず安堵の胸を撫で下ろした。だが、このあと事態は急変した。吉宗は再び気を失い、そのまま永眠したのである。
宝暦元年。御三家紀伊家から徳川宗家に入った英傑、第八代将軍吉宗は、その波乱に満ちた生涯を終えた。遺言により霊廟は造らず、五代将軍綱吉の廟に合祀された。
葬儀は上野寛永寺。江戸城より上野までの葬列、父の棺に寄り添い、歩む将軍家重と実弟田安宗武の姿があった。家重は、第七代将軍家継の生母、月光院の赦免嘆願を聞き入れ、宗武の棺同行を許可したのであった。
徳川宗家菩提寺、東叡山寛永寺に於いて、数日間に亘り大葬儀が執り行われたのち、幕府は六十余州の全てに一年間の服喪令を発した。

世間が喪に服す最中（さなか）に、浜御殿に事件が起きた。
深夜、黒装束の盗賊集団が、正門、裏門の各塀を乗り越えて侵入。警護の役人、象の監視役たちを次々に斬りつける。騒ぎに気付いた他の役人たちも、抵抗するが及ばず、悉（ことごと）く惨殺された。盗賊団の数名が懐から紙片を取り出し、御殿内の柱、数か所にそれを小柄で打ち付けた。張り紙には蛍火と墨痕淋漓に書かれてあった。
御殿内飼育場。白象の傍には象使いのヨサムが、怯えて立っている。その面前に立つ盗賊団。一人が進み出て、
「黒い小童（こわっぱ）。言葉は分かるまいが、命は取らぬ。その象から離れよ」
老人の声。盗賊団の頭領、蛍火燐兵衛である。眼が優しく笑っている。
「さ、そこをどくがよい」

言いながら右手をさっと上げた。
盗賊団の中から槍を持った男が前に出た。
「ひと思いに仕留めよ。仕損じると大騒ぎになるぞ」
言いながら、立ち竦むヨサムを抱えて横に離れた。
槍を構えた黒装束の男は、狙いを定め、すっと前に進んだ。その時、構えた槍先が大きく揺れた。男がのけ反り、足から崩れて地に倒れ込んだ。伏した男の首には矢が突き刺さっていた。
「ぬ、何奴」
叫んだ燐兵衛は、杖代わりに持っていた手槍を掲げ、身構える。
と、その時、巨象が大きな叫び声を上げた。一瞬たじろぐ燐兵衛、手がヨサムから離れた。ヨサムは咄嗟の隙を狙って、燐兵衛の手から逃れ、象に駆け寄った。象の身体が大きく揺れ、足が動いた。すると、いきなり足枷の鎖と杭が、地面から引き抜かれた。硬い鎖の筈が、苦も無く両足二本共引っこ抜かれる。もう一度象が悲鳴のような声を発した。そして、長い鼻でヨサムを抱き上げ、大きな背に乗せたのである。それはあっという間の出来事であった。象の背からヨサムがとんとんと頭を叩いた。合図を受けて巨象が前に進んだ。
行く手を阻もうと盗賊団が立ちはだかるが、大きな頭を振り、前進する象に圧倒され、次々に横っ跳びに逃げるのが精一杯である。
「何をしておる。追え、逃すでない」
燐兵衛が檄を飛ばす。
進む象の速度が増して、どんどん庭園内を抜け、正門に近づく。
「門から出すな。弓で仕留めよ」
慌てて弓を構える二人の男。だが、すぐのけ反り、地に伏した。絶命した二人の首には先刻と同じく、矢が突き刺さっていた。燐兵衛が辺りを見るが、人影はない。
「どこに潜みおるか、痴れ者め」
歯噛みする燐兵衛。
ヨサムを乗せた象が、正門を潜り抜け、江戸の闇にその姿が消えて行く。
「象を追え」
叫ぶ燐兵衛。
盗賊団が後を追いかけ、門外に躍り出る。象の姿はない。右往左往する盗賊団に、燐兵衛は舌打ちをした。
「臭いだ。餌の臭いを追い続けろ。必ず見つかる」
燐兵衛が苦々しく声を発した。

江戸市中、ある大通り。
前公方様の喪中につき、街中の灯も消え、辺りはひっそりとしている。夜、市民たちは

外出を控え、静かに家に籠り、公の法要行事が終わるまで静かに暮らしていた。
ヨサムを背に逃げてきた象が、足を止め、呼吸を整えるように休息している。
その前に三人の人影が立った。ぎょっとするヨサム。一人が前に進み出た。少女汀であった。半弓を肩にかけ、腰には革の矢袋を提げている。じっと静かに象の眼を見つめた。不思議なことに、白象は恐れも、怒りも見せず、汀を見ている。背のヨサムも、何かに打たれたように身動きせず、上から汀を見ている。
汀の白く細い右手が上がり象を指す。ゆっくりと掌を返し、何かを受ける仕草をした。象の鼻が動いた。次に汀は顔を上げ、ヨサムに手を翳す。ヨサムが小さな声を出した。聞いた汀は微笑んでいる。そして両手を前に突出し、ヨサムに声をかける仕草をした。
汀は唖者であった。後ろに立つ、笠を被り布で顔を隠した長身の男が、
「涛吾、汀は何か感じ取ったか」
と囁いた。伴天連のルシアンであった。もう一人、半弓を肩にかけ、矢袋を腰に提げた少年は涛吾であった。涛吾は汀に近寄り、肩に手を添えた。振り向いた汀が何か訴える。汀の眼をじっと見た涛吾。
「ルシアン様、象使いも、象も怖がってはいません。助けを求めています」
「そうか、安心するように伝えよ。我らは味方だ。安全な場所に連れていくとな」
将軍家重の意を、忠光が読み取るように、涛吾も、失語の汀の心の内を、読み取ることができるのであった。
双生児の涛吾と汀は、不思議な能力を持っていた。妹の汀は生まれながらの唖者。彼女は言葉を交わさずとも、相手の心を読み取ることができる。それは人に限らず、心が通じ合えば動物にも通用した。兄の涛吾は、言葉を発せぬ妹、汀の心を読み取る能力を備えていた。汀一人では、相手の心中を他人には伝えられず、涛吾が汀の心の声を、代わって他に伝える。二人揃って出来る特殊能力であった。
二人は若年ながら弓の遣い手だった。小柄なので半弓を下げている。先程の盗賊団に射た矢は、二人の弓から放たれたのだ。
「涛吾、追手が来る前に先を急ごう。神の使いをお守りするのだ。邪宗門徒たちの殺生はやむを得ぬ。気にすまいぞ」
言われた涛吾は、無言で汀に語りかける。汀が眼で答える。頷いた汀が、今度はヨサムと象に語りかける。手の仕草を使い、ヨサムと象に心の内を伝える。象使いの黒人少年ヨサムには、汀の心の声が届くのであろうか、じっと汀の眼を見据え、やがて頷いた。白い巨象も落ち着いた様子である。
「涛吾、奴らの気配を感じるぞ。すぐ近くの森に逃げよう。そこに象と象使いを隠して、我らで片をつけよう。急げ」
上手い具合に心が通じたようだ。ヨサムと象を促し先を急ぐことになった。
数軒離れた所に、森のように鬱蒼とした雑木林があった。真夜中、月も隠れ、辺り一面真っ暗闇。ヨサムと象を林の中に隠すと、三人は林の外で追手を待った。

笠を取ったルシアン、長い銀髪が闇に浮かび上がる。中央に一人立ち、涛吾と汀は手に半弓を番え、左右に散り、身を隠した。ルシアンの両手には農具の草刈り鎌が握られていた。

足音が近づいてきた。数名の人影が現れた。抜刀して襲いかかる気配。それを受けてルシアンが、だっと斜め前に走った。黒装束の一人が、振り被った上段からルシアンに斬りかかった。鋭い金音と飛ぶ火花。ルシアンの左手の鎌が、太刀を弾き返した。同時に身体を回転し、右手の鎌で男の首、後方を払った。絶叫し、血しぶきを上げて男は地に倒れ、動かない。

続けざまに襲いかかる盗賊団。受けるルシアンは、独楽のように身体を回転させ、両手に持つ鎌で剣を払い、槍を断ち、敵の首、手、胴、足までも斬り裂いていく。二刀流ならぬ二挺鎌の回転斬り。一人、二人、男たちが絶叫の内に倒れていく。急所を狙う正式な武術ではない。ルシアンの振るう二挺鎌は、殺人技だ。人あらば人を斬り、馬あらば馬を斬る。殺人鬼が振るうと世に伝わる、斬人斬馬剣。それは殺人剣ならぬ殺人鎌であった。

次々に黒い影が地に倒れ、消えていく。

「弓だ」

後方から、老人の声がした。

弓を構えた男二人がいきなり前に進み出た。前方で数名と斬り結ぶルシアンを狙って、弓矢を振り絞る。だが、二人は同時に天に矢を放ち、倒れて動かなくなった。二人の首には矢が突き刺さっていた。身を潜めて死闘を見守る涛吾と汀が、ルシアンの援護で矢を放ったのだ。

「うぬ、小癪な。下がれ、俺がやる」

杖代わりの手槍を持ち、蛍火燐兵衛が前に出た。

「異相の若いの。変わった技だのう。象はあの森の中か」

燐兵衛が落ち着いた声音で言う。

「老体、無用の殺生は好まぬ。退いてはくれぬか」

ルシアンが息を整えながら答える。

「退くのは仕事を終えてからだ。若造、二本鎌とは笑止。所詮は児戯。この俺に刃先が届くかのう」

燐兵衛は語り掛けながら、ルシアンとの間合いを測る。

「独り工夫した、神罰を下す技だ。試してみるか」

対峙するルシアンが挑発する。

すっくと立つルシアン。銀髪が妖しく揺れる。低く槍を構える燐兵衛。覆面から白髪が覗く。先に仕掛けたのは燐兵衛。ルシアンの胸を目がけて手槍を繰り出す。受けるルシアン、身体を回転しながら片手で槍を弾き返し、もう一方で相手の身体を抉(えぐ)る。筈であった。だが槍には当らない。さっと引いた燐兵衛が二の槍、三の槍を繰り出す。右に左に回転し、

槍を躱すルシアン。見事な体術だが、ルシアンの振るう二挺鎌は、燐兵衛には届かない。
燐兵衛も前に、後ろに、出る、退く、だがルシアンには当らない。両者、さっと退いて呼吸を整える。対峙し、睨み合う二人。双方が間を詰めていく。一気に決着を付けんとする燐兵衛。槍を躱すか、弾き返すか、両手の鎌を大きく広げて身構えるルシアン。双方が動く瞬間、二本の矢が宙を切った。
燐兵衛が咄嗟に身を躱した。一本は避けられたが、もう一本の矢は燐兵衛の左肩に突き刺さった。
「卑怯なり。尋常の立ち合いぞ」
叫んだ燐兵衛は、一歩下がり、槍を地面に刺し立て、右手で肩の矢を引き抜いた。
「若造、逃げられると思うな」
ルシアンに向かって言葉を吐き。
「ひとまず退け」
と叫んだ。
頭目が負傷したのを受け、盗賊団は燐兵衛を庇いながら、退いていった。
人影が消えたあとには、ルシアンによって斬られた男たちが、辺りに数名倒れていた。まだ息のある者もいる。苦悶の声が闇に流れた。例え悪人たちと雖(いえど)も、神を信じる者が、このような残忍な殺戮をして、果たして許されるのであろうか。残虐非道な行いに、月も最早つき合いきれぬとばかり、姿を見せず、暗雲が天を包む夜であった。

象と象使いヨサム、それを命がけで守るルシアン、涛吾、汀。ひとまず危機を脱して、夜陰に紛れて行動を開始、陽が昇ると見つけた森林に身を隠す。そして陽が落ちると、そうっと動き出す。しかし、江戸市民の目に触れず、逃げ延びるには無理がある。当然ながら、偶然出くわす町の衆は、皆その異様な光景に仰天した。
「あ、あれはなんだ」
「あれは象か」
「噂の神象」
「浜御殿から逃げたのか」
「番所に知らせろ」
大騒ぎである。騒ぎを聞いて、駆けつける捕方役人たち。数名で象の周りを取り囲む。十手、刺又を翳して取り押さえようとするが、何せ相手は巨象。巨体だけに緩慢な動作と思うと、やにわに素早い動きを見せる。周囲の物全てを頭、鼻、胴体で破壊してしまう。とても手が付けられない。捕方役人たちは、象が近寄れば逃げる、右往左往の有様。六尺棒で挑んだ数人の捕方役人が、鼻で吹っ飛ばされ、突っ伏している。静かにしているかと思えば、瞬間動き回る象、巨体に似合わず敏捷であった。
離れて恐々見物する町の衆は、普段威張り散らす憎い八丁堀同心や捕方たちが、象に吹

っ飛ばされる姿に、内心喜んでいた。
天が象に味方した。
晴れ上がっていた空に、一点黒雲が生まれ、大きく膨らみ、暗雲となって瞬く間に広がり、上空を覆い尽くした。
一閃、稲妻が走り、耳を劈く雷鳴。大粒の雨が突風に乗って、地面に突き刺さるように降り注ぐ。江戸市中、集中豪雨の大嵐となっていった。
地面に叩き付ける豪雨。水煙が立ち昇り、象の姿がぼんやり霞んでいく。ゆっくり前に歩を進める象。その影が水煙の彼方に消えていく。
嵐は数日も続いた。捕方役人が象を捕り逃がした事件、一部始終を目撃した市民たちは、
「あの嵐は神象様が起こしたのだ」
「違いない。神象様のお怒りだ」
民衆は口々に神象の起こした大嵐だと叫んだ。

象とヨサム、ルシアン一行が逃走中のことであった。
大嵐で民家が倒壊した。家屋の下敷きになった女児を救い出そうとする両親。自分たちも大怪我を負い、どうにもならず泣き叫び、助けを呼ぶ。駆けつけた近隣の者たち。必死に救助しようとするが、暴風雨の最中、どうにも捗らない。
その時、象が現れた。背に乗る黒い少年が象を操り、倒壊した家屋の残骸を鼻で押し上げ、跳ね除ける。そして、残骸の下に半身埋った女児を、鼻で救い上げた。女児は気を失っていたが、無傷であった。
雨の中、象一行は立ち去っていく。雨に打たれながら民衆は、消えゆく象の影に手を合わせた。
「神象様。あれは正しく神象様」
人々は口々に叫んだと言う。
神象の起こした怒りの大嵐と、家の下敷きになった女児を無傷で救った噂は、すぐに江戸市中に広まっていった。その後、豪雨の先に消えた象一行の行方は、南北両町奉行必死の探索でも、杳として知れず、街道筋にも象の噂は上らなかった。

話は少し戻る。
江戸城。老中田沼意次と幕府閣僚たちに火急の知らせがもたらされた。
深夜、浜御殿に狼藉者集団が侵入。警護の役人が殺害され、象と象使いが連れ去られた。
それを聞いた意次は、
「なんと、未だ吉宗公の喪中であるぞ。天を恐れぬ奴ばら。即刻南北奉行所に探索させよ」
驚きと怒りの声を上げた。
将軍家重の下にも、側近から事件が伝えられた。象が居なくなったと聞かされた家重は、

飛び上がって驚き、激怒した。
「父上の法要も未だ終えぬとき、なんたること。すぐひっ捕らえよ。許さぬ」
すぐに御側用人忠光に命を下し、
「あれは余の大切なる神象。我が命がかかる象を救い出せ。狼藉者は即刻打ち首にせよ。忠光、象と象使いは傷つけてはならぬ。何があっても助けよ。断じて殺すでないぞ」
「心得てございます。町方役人総出で江戸中を探し回っております。暫し、お待ち下さりますよう」
「神象は無事に保護せよ。死なすな」
狼狽える家重は繰り返し叫ぶだけであった。

老中意次と御側用人忠光は、起きた事件の重大さを知っていた。
「御老中、これは天下の一大事です」
青ざめた顔で忠光が言うと、
「おこともそう思うか。未だ吉宗公の墓土が乾かぬうちに、このようなことが起きるとは。何者かの天下を狙う仕業と見た」
意次が冷静な声音で答える。
「町奉行の報告によれば、蛍火と呼ばれる盗賊団とのこと」
「大胆不敵な奴ばら。その盗賊どもの名は、時折耳にする」
「背後に糸を引く大物がいると思われます」
「闇の軍団というのもよく聞く名だ。ここは町方の両奉行に限らず、公儀御庭番の出動もあるな」
「やはり、そうなりましょうか。一刻も早く解決せねば、上様のお怒りは治まりませぬ」
「相分かった。これより儂も動く。おことは上様の機嫌を上手く取り繕ってくれ」
「承知しました。気が重いが、上様を御せるのはそれがし一人にござる。しからば御免」
挨拶もそこそこに忠光は下がっていった。

老中の間にあって、意次は一人座して眼を閉じ、考えを巡らせていた。
「御免」
声がして、二人の男が入ってきた。一人は老人。もう一人は壮年の屈強そうな男である。
二人を見て、意次は威儀を正し、
「これは、お呼び立てして申し訳ございませぬ。本来ならば、こちらから参上いたさねばならぬ身」
「老中殿、火急のことゆえ、構わぬ。無礼にはあたわず。気にすまいぞ」
「お久しゅうござる。意次殿」
二人がそれぞれ意次に声をかけた。挨拶を終え、鼎の位置に座した三人。
「越前様、備前殿。お二人の知恵と力をお借りしたい」

越前と呼ばれた老人は、前将軍吉宗時代、江戸町奉行として活躍し、のちに大名まで昇り詰めた大岡越前守忠相であった。西大平藩一万石の藩主である。因みに町奉行から大名にまで出世したのは、大岡忠相只一人である。

備前と呼ばれたもう一人のいかつい武士は、大和柳生藩一万石の藩主、柳生備前守俊方であった。初代柳生但馬守宗矩から数えて第五代目藩主となる。代々将軍家兵法師範を務める身分である。

三人の密議が始まった。

「ううむ。老中殿は、此度の出来（しゅったい）、天下争乱の火種ありと申されるか」

越前守忠相が呟く。

「確信は持てませぬが、なんとのう臭いまする」

「他言を憚るが、田安門あたりの御仁かな。背後に尾州家、そんなところか」

「ご慧眼、畏れ入ります。先代吉宗公以来続く尾州様との確執。あながち的外れとも言い切れませぬ」

声を潜めて意次が答える。

「御三家筆頭の尾州を差し置いて、紀州より罷り出た将軍吉宗公。尾州家の遺恨は分からぬでもないが、御政道は曲げられぬ。正しい判断であらせたのだ」

「御意。さりながら御両家、長い因縁でござる」

柳生備前守俊方はじっと二人のやりとりを聞いている。

「ところで老中殿、御側用人忠光殿は相変わらず多忙でござろうな」

「それはもう。昼夜を厭わず、上様にお仕え致しております」

「それは、同じ大岡一門として、誉れ高い」

「切腹覚悟で申せば、忠光殿なくして、上様は将軍たり得ませぬ。忠光殿こそ真（まこと）の忠臣にござる」

言われて忠相が微笑んだ。そして、

「さて、老中殿、ここはご同席の備前殿にひと肌脱いで貰わねば、事は解決しないと見た」

「越前様のお口添え忝（かたじけな）うございます」

意次が頭を下げた。

二人の視線が備前守俊方に向けられた。

「お話の筋、了解にございます。徳川幕府百年の大計を鑑み、初代但馬守が精魂傾けて築き上げた公儀陰の軍団。ご要望あれば差し向けまする」

「お訊ねいたす。備前殿は将軍家兵法指南役、つまり表柳生。では、裏柳生の総帥はどなたでござる」

意次が訊ねる。

「それがしが建前上、総指揮権を持つ総帥にござる。が、実際は、裏柳生は別の者。時代が移り、名を明かすことは出来ませぬ」
「かつて総帥として指揮を執られた、二代目十兵衛殿の縁者であろうな。相分かった、名は聞くまい。備前殿、事は隠密裏に運ばねばならぬ。公儀のために動いては貰えぬか」
「只今、話に出た辺りでござるな。御下命、承って候」
「忝い。良しなに、お頼み申す」
意次が深々と頭を下げた。
「これで話はついたの」
忠相が言うと、
「越前様、備前殿、ご足労願い、感謝します。全ては上様、公儀のため、よろしくお願い申し上げます」
「なんの、此度は早く決着を図らねばならぬこと」
大岡忠相が頷いて言った。

麻布にある柳生家の屋敷。
当主備前守俊方は、邸内の道場で日課の型稽古。木刀を振るい、一汗かいてのち、正面師範の座にどっかり座り、休息している。と、
「殿、お召しにより参上」
壁の外側、庭園の方から声がした。
「うむ。上がって参れ」
俊方が答えた。

板戸が開き、男がすうっと入ってきて、俊方の前に跪(ひざまず)いた。一見、初老の武士である。
「妖斎、久しいのう。昔とちっとも変らぬな」
「殿もお変わりなく、ご壮健にて何よりでござります」
「いやいや、お城勤めは性に合わん。体が鈍(なま)る。そこへいくと、そなたは元気だ」
「お蔭様にて、生き永らえております」
「無論、国元の無庵様もお変わりあるまいな」
「息災におわします」
「それは重畳。そなたを呼びつけたのは他でもない」
「象にまつわる一件でござるな」
「分かるか。相変わらず鼻が利くのう」
「おおよその見当はつきます」
「ならば話が早い。御三家の一つ、御三卿の一つ。それらに妙な動きがある。身辺を探ってくれ」

「心得ました。浜御殿に侵入した盗賊団はいかに」
「それもだ。全て洗いざらい調べて報告せよ」
「蛍火と申す盗賊団、陰で糸引く者、分かり次第、討ち取りまするか」
「それはまだよい。迂闊には手は出せぬ。独断は禁物である」
「御下知、承ってござる。これにて御免」
妖斎と呼ばれた武士は下がっていった。

大和国柳生藩。初代但馬守宗矩の功績で、知行一万二千石までいったが、代替わりで減封され、今は一万石。所領地、柳生庄には第二代藩主、柳生十兵衛三厳が築造した正木坂道場がある。十兵衛在世時は、将軍家兵法、柳生新陰流の盛名を聞き、全国から指南を求める門弟たち、延二万に及ぶとある。

その正木坂道場から離れた森の中に、小さな庵がひっそりと佇んでいる。庵の名は無庵。庵主は里人から無庵様と呼ばれる老女であった。藩主であり剣客としても高名な、柳生十兵衛と愛弟子の忍びくノ一との間に生まれた娘であった。

庵の中、茶を点てる無庵の前に、江戸より戻った妖斎が座っている。
「妖斎、備前守は変わりないぞや」
「はい。皆様、息災にござる」
「先代の対馬守よりは、備前守の方が胆が据わっているようだの」
「それがしもそう見ております」
妖斎が答える。
「さて、備前守の申し入れ、つまりは表柳生からの依頼。相分かった。そなたに任せる。良きにいたせ」
「では、軍団を少々使わせて頂きます」
「尾張家が絡んでおるのか。あそこには我が一門の者が、兵法師範として代々仕えておる。そなたも会うたことがあろう」
「尾張柳生家初代の兵庫助様には、若き頃にご指南を受けた覚えがござる。あと、御子息の連也斎殿とは、稽古試合をいく度か。まともに打ち合ってはとても歯が立ちません」
「それが尾張柳生よ。私も若き頃、柳生庄に挨拶に参られた連也斎殿と、立ち合ったことがある」
「三度立ち合い、相打ちの双方互角。と聞いておりますが」
「あれは、宗家の体面を慮(おもんぱか)って連也斎殿が手を抜いてくれたのだ」
「本当のところはどちらが上でござった」
「埒もない。稽古試合じゃ。勝ちもし、負けもする。懐かしいぞや」
無庵が楽しそうに笑った。
「無庵様。公儀は御三家筆頭尾張家と雖も、容赦はしませぬぞ」

「尾張柳生の当代は厳延か。腕前はたかが知れておる。裏柳生総帥の私が、厳延に伝えようぞ。此度の件、尾張家は関わるなと。尾張柳生も、お家のため見て見ぬふりをせよと」
「総帥の命には絶対逆らえぬ掟。尾張柳生とはちと面倒な間柄ゆえ、手出し無用とはありがたい」
「何も案ずるな。あっさり片づけて参れ」
「然らば、御免」
妖斎が立ち去っていった。
柳生家は大名ながら将軍家兵法指南役。それは表向き。裏では公儀隠密集団、裏柳生、陰の軍団として幕政を支えていた。その当代総帥は、創始者柳生十兵衛の娘、無庵であった。

駿河国。御殿場、荒野の片隅にある古刹。実は隠れ切支丹の南蛮時。本堂が教会となっている。
裏庭の古い御堂にひとまず白象を隠したルシアン一行。
教会内でルシアンと涛吾が討論している。
「ルシアン様、主の名の下に人を殺めること、私には解せませぬ。亡くなられた先の伴天連様からは、人を傷つけてはならぬと教えられました」
「涛吾、先の伴天連様は、我らを救ってくれた大恩人。本来ならそうあるべきだ。だが聞け、我らは禁教令の下に弾圧を受け、夥(おびただ)しい数の信徒が虐殺された。そのこと断じて忘れてはならぬ。我らを排除する者、それらは邪宗門徒である。天に代りて罰を下す。これは正義の行いである」
「殺戮が正義でしょうか。私には分かりません」
「お前はまだ少年だ。私の歳になればきっと分かる。今は黙って私の言うことを聞くのだ」
涛吾は、これ以上反論することができなかった。悄然として、汀のいる裏の御堂に戻っていった。
象のいる御堂では、汀とヨサムが笑顔で向き合っていた。ヨサムには、汀の手から伝わる心の声が分かるのであろうか。嬉しそうにしている。汀の方も、ヨサムが発する異国の言葉が、心の声となって読み取れるようだ。心の声でお互いを理解する。なんとも不思議な光景である。二人は地面に小さな棒切れで、絵を描き始めた。理解し難い部分は、絵によって伝える。どうやら絵による会話が始まったようだ。汀とヨサムの楽しげな心の声と絵による会話。傍で二人を見る涛吾は、辛いことを暫し忘れて、心が和むのであった。
深夜、涛吾と汀が心の会話をする。汀が涛吾に語る。
「ヨサムは南洋の大陸から象と共に連れてこられた。いろんな国を経て、この地に来たと言う。象の額の十字架は神の使いと、どこの国でも言われたそう。生きて、象と共に故郷に帰りたいと言っている」

「可哀そうに。俺たちにできることは、匿(かくま)ってお守りすること。その先はルシアン様がお考えになる」
「涛吾、ルシアン様を過信するな。私はあの方が恐ろしい時もある」
「俺もだ、汀。亡くなられた前の伴天連様とは教えが違う」
二人は、そこで話を打ち切った。話しても絶望感だけが残るからであった。
教会内、伴天連ルシアンは忙しく動き回っていた。信者らしき者が数名、入れ代わり立ち代わり、出入りする。皆、ルシアンの指示で慌ただしく外に飛び出していった。
象は落ち着いている。ヨサムは象の世話に余念がない。そのヨサム、心の会話ができる汀に全てを話し、安心したのか、笑顔が戻ってきた。汀も象の世話を手伝い、象も汀に懐いて、仲良しになっている。涛吾はヨサムに簡単な言葉を教え始めた。
隠れ切支丹の南蛮寺は、不安を抱える中、一見平穏な日々が続いていた。

品川。廻船問屋、梵天屋邸内。
苦虫を噛み潰したような顔の梵天屋利左衛門こと、怪盗烏玉夜兵衛。
「燐兵衛、浅手で済んで良かったの」
「大事ない、これしきの傷」
蛍火燐兵衛が傷口を手で押さえて答えた。
「相手は隠れ切支丹の残党とか。誠か」
「多分な。今、配下の者に公儀御庭番の動向を探らせている。奴らの動きで象の所在がいずれ分かる」
「実はな、燐兵衛。尾州公からのお達しで、この件には一切関わらぬ、とのことだ。俺もそれが良いとお答えした。天下争乱となるほどの大きな物には成り得ないと見た」
「尾州が関知せずともよいは。俺はあの隠れ切支丹どもに、ひと泡吹かせてやらねば気がすまぬ」
「好きにせよ。だが象は殺せ。田安公からたっぷり金を吸い取ってやる」
「御庭番が動けば、その元の裏柳生に知れる。我らに気づくのは時間の問題。お主も俺も狙われることになる。裏柳生だぞ、手強い」
「さて、そこまで気づくであろうか」
「甘く見ないことだ。約束は果たす。象は必ず始末する」
言い放って燐兵衛は足早に去っていった。

江戸城、老中の間。意次の前に柳生俊方が座っている。
「尾張家に於かれては、此度の一件、全くの関わり無しと言われるか」
「御意」
「それは重畳。では田安公の独り歩きであるか」

「いや、内実は、主君宗武様のご心中を酌んで、家老の堀田勘解由の謀（はかりごと）。その下知を受けたは、御三家にも出入りする御用商人梵天屋。それに盗賊団も絡んでおる様子」
「なんと、御三家出入り商人とな。それは、聞き捨てならぬ」
「さりながら、それと尾州藩は無関係にござる」
「あくまで田安公と命を受けた悪徳商人の謀であるな」
「御意。蛍火なる盗賊団は梵天屋の手先でござる」
「備前殿、よくぞそこまで調べてくれた。御礼申す」
「国元の裏柳生の探索にござる。象の行方も間もなく報告がござりましょう」
「田安公は上様御実弟。なれど御政道は曲げられぬ。この始末は慎重に致さねば。嘗ての三代将軍家光公と、弟君駿河大納言忠長卿との骨肉の争い。同じ轍は踏まぬ」
意次が深く息を吐いた。
「田安公と家老には、御公儀の名の下に、それがしが断を下す。徳川宗家の御兄弟の争い、世間に知れては天下の恥。備前殿、とりあえず、梵天屋と蛍火盗賊団の始末、密かに成し遂げねばならぬ故、このことお願い申す」
「承知仕った。然らば、これにて」
柳生備前守が静々と下がっていった。

数日して、御三卿田安宗武邸に公儀の使者が入った。
将軍家重の名の下、公儀御下命が老中を介して、宗武とその家老堀田勘解由に申し渡された。使者の口上、
「田安宗武。かねて、オランダ国より寄贈を受けし上様御寵愛の象。殺生せしめんと襲い、図らずも象の逃亡に至り、未だ行方知れずとなりし事件。元は田安家に於ける謀議であると、公儀の知るところと成りし段、誠に不届き至極。その罪、万死に当たるものなり。されど、先代吉宗公の喪中であること、また兄君である上様の惻隠の情これあり。本来死を以って償うところ、特別に、本日より無期限の蟄居、謹慎を申し付けるものなり」
宗武には一切の申し開きはさせぬ下命であった。
田安家家老、堀田勘解由には、事件の首謀者としての罪状を読み上げて、切腹を言い渡した。観念した勘解由は、武士らしく従容として死に臨み、見事に切腹して果てた。

夜。徳川御三家筆頭、尾張藩上屋敷。
裏通用門より、頭巾を被った商人姿の老人が出てきた。供は三名。一人が提灯を提げて道を照らし、あとは揃って駕籠の置き場所に急ぎ足。屋敷を曲がり、暗い夜道を進むと、行く手に黒覆面、黒装束の武士が立っていた。
「何者」
提灯を掲げた一人が叫んだ。すぐに主人の前に供の三人が進み出る。

黒装束の男の片手が上がった。空を切る音がして、供の三名が三方に分かれて倒れた。三名の首に忍び苦無(くない)が突き刺さって、すでに絶命していた。

一人になった頭巾の商人姿に向かって、男が、

「梵天屋利左衛門、とは偽りの名。真(まこと)の名は烏玉夜兵衛。張孔堂由比正雪及び天一坊改行の残党。よくぞここまで生き延びた。だがこれまでだ。ここで命を落とすこと、お抱えの尾州公も容認されておる」

「ふん。裏柳生のお出ましか。本日、御家老から出入りを差し止められたは。貴様たちが現れるのは分かっていた。死ぬものかよ」

言いながら夜兵衛は、懐から短筒を取り出した。

その時、黒装束の男が、闇を斬る鋭い気合を発した。一瞬、夜兵衛の手が止まった。同時に男が太刀を抜きざま夜兵衛に斬りつけた。夜兵衛の眉間が割れ、頭巾から真っ赤な血潮が噴き出て、膝から崩れ落ちた。あっけなく夜兵衛は地に伏したまま絶命した。

太刀を拭う黒装束の武士の背後に、配下の者であろうか、同じ黒装束の影が数名現れた。

「お見事。妖斎様」

一人の影が声をかけた。

「これで先ず一人片づいた」

妖斎はそう言いながら太刀を鞘に納めた。

「只今の技は」

もう一人の影が問うた。

「柳生十兵衛様直伝の心気遠当(とおあて)。古来伝わる居竦みの術から考案された業だ」

心気遠当、相手に凝縮した気を放ち、一瞬金縛りにする。同時に払う抜刀術。重ね技の必殺剣であった。

「さて、蛍火燐兵衛はいかがであった」

妖斎が訊いた。

「それが、隠れ家を包囲して踏み込みましたが、盗賊団の半数しか残っておらず、それらは討ち取りましたが、主犯の燐兵衛たちは、すでに逃げ失せたようです」

「やはりな。まあよいは。象の所在先にまた現れようぞ。焦ることはない」

妖斎と忍び衆は、夜の闇に消えていった。

江戸城本丸。将軍御座所。

将軍家重は、神象と信ずる渡来象と会えなくなって以来、また元の歪んだ顔になり、言語障害と頻尿が戻っていた。

家重の言葉を御側用人忠光が御意仲介して言う。

「御殿場にある古き寺が、実は南蛮寺。そこに隠れ切支丹が潜みおると申すか」。
「御意。どうやらその寺内に象と、象使いは匿われているようでございます」
老中田沼意次が答えた。
「よいか、隠れ切支丹は全て始末せよ。生かしてはならぬ。だが、神象と象使いは断じて傷付けてはならぬ。救い出せ。万一死した場合は、その方らも全て腹を切れ。よいな」
家重が錯乱したように絶叫する。
「南北、両町奉行の捕り方と、関八州の役人を総動員して、象と象使いを救出します。上様にはお気を鎮めてお待ち下さりますよう」
意次が必死で、家重をなだめた。

老中の間に引き下がった意次と忠光。
「御老中。上手く事が運びますかな。隠れ切支丹が誠なら、公儀に徹底抗戦は必定。象は易々と救出は無理かと」
「それよ。象など死ねばよいのだ」
意次が吐き捨てるように言った。
「なんと言われる」
「考えてもみよ。此度の件、元々は上様の気紛れから発した事。たかが象如きで、多くの犠牲を払う道理があろうか。紛争のどさくさで、象は切支丹どもが道連れに殺した。それで全て上手く治まる。我らまで死罪などと、笑止千万。巻き添えを食らって切腹など、愚行の限りである」
「流石。御老中は豪胆でおわす。差配は口の堅い者に命じましょう」
「案ずるな。もうすでに命じておる。上様に伝わらなければ済むこと。馬鹿馬鹿しい事件であるが、隠れ切支丹の残党を、一網打尽に処する良き機会ぞ」
意次と忠光は、腹の底から込み上げる笑いを堪えていた。

御殿場の南蛮寺。寺の周辺に幕府の捕り方が集結した。
合戦ではないと見たのか、甲冑姿ではなく、いつもの捕物装束である。現公方が暗黒大陸の渡来象を、天覧に御すると公言した手前、表立った幕兵を動員するのは世間を憚る。意次の判断であった。

江戸南北奉行所捕手(とりて)と、公儀直轄領の捕手、総動員で寺の周囲を取り囲んでいた。
切支丹信徒は全てその場で断罪。しかし、象と象使いの救出は難しい任務である。老中の密命を受けた関八州代官が、腹心の臣に密かに殺害を命じていた。寺を取り囲む捕手役人は、寺内に攻め込む機を窺っている。あとは突撃指令を待つばかりである。
そのとき、寺の門が開いた。白い巨象が姿を現した。異様な物を身に纏っている。象の頭部から胴回り、足の裾まですっぽり被せられているのは、鎖帷子。ルシアンが考案して、

信徒たちに作らせた象雌子であった。かなりの重量だが、象の身を守るためには、仕方のない事と、ヨサムも納得していた。肝腎の象自体、その動きに変化は見られなかった。

幕府捕手たちも、最初から象に危害を加えるつもりはなく、象の安全は保たれていた。

指揮官の代官が、突撃の号令を発した。

捕手たちが一斉に、象の立つ門に、雪崩を打って突っ込んでいく。直後、背後の深く生い茂った草叢から、集団が湧き上がった。荒野に潜んで機を窺っていた群衆。手に手に弓矢、槍、農具の鎌、短刀、中には種子島を持つ者もいた。群衆たちはそれぞれ、思い思いの武器を振りかざして捕手たちに襲いかかった。ルシアンの、神の使いをお守りせよという号令に、各地から馳せ参じた隠れ切支丹信徒たちである。

「神の使いをお守りするのだ」

「神象様を救え」

口々に叫んで襲いかかる。

広大な草原は戦場と化し、血まみれの捕手たちが次々に倒れていく。切支丹信者の中にも顔面を血に染めて突っ伏す者もいる。どちらも傷つき、息絶えていく。一か所だけ捕手が多く倒れている。ルシアンの獅子奮迅の働きである。両手に持つ二挺鎌に、多くの捕手が斬られて倒れ込む。その勢いに乗って、指揮官の眼前まで信者が迫る勢いに、

「退け、退け、退くのだ」

堪らず代官が叫んだ。

幕府捕手たちは全滅に近い状態で、蜘蛛の子を散らす如く逃げ去った。

ひとまず戦いは終わり、生き残った信者たちは、寺内に入り、硬く門を閉じて、籠城の備えを始めた。皆、死を恐れぬ者たち。象の居る御堂に集まり、白象の眉間に刻まれた十字架に手を合わせ、無事を喜んだ。

陽が落ちて、月光が照らす寺の周辺、激戦の荒野、両軍の亡骸だけが無残に転がっていた。

寺の正門。その近くから数名の影が浮かび上がった。

寺内に侵入しようとする集団。闇の軍団、蛍火盗賊団であった。そのとき盗賊団を取り囲むように、四方八方から人影が立った。

「ち、伴天連ルシアンを仕留めようと思ったが、とんだ邪魔が入った」

頭目蛍火燐兵衛が舌打ちした。

取り囲んだ背後の集団から、一人の影が進み出た。

「蛍火燐兵衛よ、お主だけはこの俺が相手だ。よくぞここまで生き延びた。仲間の烏玉夜兵衛が、首を長くして地獄で待っておるぞ」

覆面の眼が笑っている。陰の軍団、裏柳生、妖斎である。

「推参なり、裏柳生。ここまで生きたのだ、悔いは無し。来い、道連れにしてやる」

燐兵衛が手槍を構えた。

すでに陰と闇の両軍団は、戦闘が始まっていた。あっけなく黒装束の盗賊団が倒されていく。

燐兵衛は手負いであった。急所を外れたとはいえ、左肩に受けた矢傷は未だ癒えず、縦横に槍は振るえない。長い剣戟を避け、一気に勝負を決める覚悟。

燐兵衛が槍を振り上げ、投げつけようとした。手槍による得意の投槍である。刺されば良し、躱されても、崩れた相手の態勢に抜き打ちで勝負をつける。

妖斎の口から鋭い声が発せられた。同時に右手から脇差が放たれた。一瞬燐兵衛の身体が硬直した。妖斎が放った脇差は、弧を描き燐兵衛の首を削いだ。血しぶきを上げて燐兵衛は、前方に倒れ伏した。

柳生十兵衛秘伝、心気遠当。古来伝わる居竦みの体術に、工夫を凝らして編み出した技。他を圧倒する気を発して、一瞬相手を硬直せしめる、不動体の業。妖斎が放った脇差は、飛旋剣という柳生の投太刀。同時に放った二つの合わせ技であった。

闇の軍団を悉く討ち取った陰の軍団。妖斎の下に集合した。

「我らの任務は、夜兵衛、燐兵衛一味の、始末をすること。象と隠れ切支丹は、幕閣の仕事、我らには無関係。終わった。退き上げるぞ」

脇差を腰に収めた妖斎が言い放ち、陰の軍団、裏柳生は足早に去っていった。

戦闘のあとの南蛮寺内。

象の世話をするヨサム。横に立つ汀。二人の心の会話が始まった。上手く伝わらぬときは、地面に棒で絵を描く。二人だけの絵会話である。

「そうなの。ヨサムの故郷には、大草原に聳え立つ、雪を戴く大きな山があるのね。帰りたいでしょうね。この地にも、富士という万年雪を被った大きな山があるけど」

次々に、棒で地に絵を描きながら、ヨサムと汀の会話は続いている。

教会内では、象から外した特製の鎖帷子を畳みながら、涛吾がルシアンに話しかけていた。

「ルシアン様、次はいつ攻めてきますか」

「そうよな、二三日後であろうか。それが最後の決戦となろう。我らは死は恐れぬ。だが、神の使いだけはお守りし、どこぞに逃がさねばならぬ」

涛吾を横目で見やり、ルシアンは話し続ける。

「涛吾、まだ年端も行かぬそなたら兄妹、人を殺める苦しさを味あわせ、誠にすまぬと思うておる。本来ならば、お前の申すことが正しいのだ」

「ルシアン様、そのことはもうよろしいのです。今となっては、命を懸けて神の使いをお守りすること、それだけを考えております」

「そうか、すまぬ」

「それより、次の攻撃には軍兵が出動すると思われます」

「そう思う。ここに至って幕府の面子は丸潰れだ。本気で兵を出すだろう。鉄砲隊で攻め

てくる。とても歯が立たぬ」
「死ぬのは怖くありません。心残りは汀です。妹だけは助けとうございます」
「それよ、幕軍が押し寄せる前に、神象とヨサム、そして汀は逃がそうと思っている」
「ありがとうございます。私は残りて、ルシアン様と共に戦いまする」
「涛吾、よくぞ申した。少年で不憫とは思うが、男に生まれし信徒の定め。命を懸けて神の使いをお守りするのだ」
「はい。誓います」
気高い声を発して涛吾が答えた。
「して、象たちを逃す手立てがございまするか」
涛吾が不安げに訊ねる。
「ある。我らが幕軍を食い止めている間に、裏門から飛び出し、銃弾を躱して真っ直ぐ裏山に走り、獣道を頼りに進み、峠に出るのだ。そこは籠坂という峠だ。そこから一本道。運を天に任せてひたすら走れ」
「え、あの峠を果たして象が越えられましょうや」
「越えねば助からぬ。天命に任せて真っ直ぐ突き進むまで。その先に光明が見えるのを信じるのだ」
「分かりました。象帷子を纏って、無事に裏山に逃れることを祈ります」
「信じるのだ。あの鎖帷子は鉄砲の銃弾、矢、槍ですら跳ね返すであろう。そう信じるのだ」
涛吾は、運命を共にするルシアンを信じた。
神象もヨサムも、愛する妹、汀も、無事逃げ遂せて、生き延びることを祈り続けた。

三日後。
汚名挽回を期して、幕府は軍勢を繰り出し、再度御殿場の荒野に集結した。
前回攻撃時、幕府捕り方役人たちは、近隣から集まった隠れ切支丹の数が、さほど多いとは思わず、惨敗を喫した。油断であった。二度の失敗は許されない。幕閣の命取り、それだけではない。徳川幕府の権威が失墜するのだ。
今回は近隣の諸侯からの援軍も加わっている。兵士は全て甲冑に身を固め、合戦の様相を呈していた。鉄砲隊が前列に配置され、攻撃の準備は整った。
寺内に籠る信徒たちはその数、百名に届かず。一同決死の覚悟でいる。その顔は穏やかであった。
御堂の前。白き象。神の使いと信ずる切支丹信徒たちが、跪いて祈りを捧げている。象は特製鎖帷子を纏っている。その背には黒人少年ヨサムが跨り、悲壮の顔つきでいる。
やにわにルシアンが、汀を抱え上げ、象の背に乗せた。驚く汀を受けて抑えるヨサム。
涛吾が声をかけた。
「汀、象と共に行け。生きよ」

汀が首を振り、泣き出した。哀れ、声は発せない。
「聞け、汀。俺の望みだ。生きろ」
周りの信徒たちが、全て泣いている。
ルシアンが進み出で、全員に聞こえるように叫んだ。
「皆も聞け。聖書にある。鳥のように山へ逃げよ」
聞こえた信徒たちが、口々に叫んだ。
「鳥のように山へ逃げよ。鳥のように山へ逃げよ。鳥のように山へ逃げよ」
寺内に残る全ての信徒たちの声が、合唱となって響いた。合唱は続き、谺（こだま）となって響き渡り、取り囲む幕軍たちにも聞こえた。
「鳥のように山へ逃げよ。鳥のように山へ逃げよ。鳥のように山へ逃げよ」
信徒たちは、合唱をいつまでも続けていた。それは彼らの祈りの言葉となって、荒野に響き、山々に流れていった。
寺の裏門が開いた。鎖帷子を纏った象が進み出た。背にはヨサムと汀。だが、姿が見えない。象の背中の帷子、その中に身を隠している。どんどん進む。裏山目掛けて突き進む。
待ち構える幕軍鉄砲隊。一斉に銃を放つ。銃声が響く。当たっている。しかし象は止まらない。ルシアンが言ったように、象帷子が銃弾を跳ね返したのだ。象の突進から慌てて逃げる兵士たち。そのまま象は、背に隠れるヨサムと汀を乗せて、真っ直ぐ裏山に駆け込んでいった。
禁教令に基づく、幕府軍の総攻撃が開始された。武装した兵士と神の使い、象を守らんとする信徒たちの、虚しい殺し合いが始まった。
……鳥のように山へ逃げよ。鳥のように山へ逃げよ。鳥のように山へ逃げよ……
祈りとなった言葉を発しながら、信徒たちは銃弾を浴びて、次々に倒れていく。
伴天連ルシアンは、信者の中心にいて、檄を飛ばしていた。傍には弓を構えた涛吾の姿もある。だが、幕軍の凄まじい攻撃に、衆寡敵せず、味方は悉く戦塵に散った。最後に残る二人。ルシアンが鉄砲隊に向かって、二挺鎌を持つ両手を大きく広げ、立ちはだかる。仁王立ちのルシアン。銃声が響き、ルシアンは、鉄砲隊の銃弾を浴びて絶命した。
「ルシアン様」
傍に駆け寄る涛吾。
一発の銃弾が、涛吾の頭を貫いた。死した涛吾の顔に、涙は無かった。

徹底抗戦の隠れ切支丹を、全て制圧した幕府軍は、突入した寺内を探し回ったが、残党は一人も居なかった。寺に残る文書などを調べても、切支丹の証拠品は出てこない。取り逃がした象の行方も分からず、指揮官の焦る声が虚しく響いた。
土地に詳しい者が召し出され、裏山から獣道を抜けて峠に出ることを知った指揮官。
「間道を抜け、籠坂峠を越えるようだ。足取りを追え。逃がすな。鉄砲隊も向かうのだ。

追いつき次第、撃ち殺せ」
指揮官が檄を飛ばす。
道筋を知る者の案内で、銃を持った兵士が象の足取りを追い始めた。

白象は峠の近くまで逃げてきた。裏山に飛び込んでから、すぐに森林中に身を隠し、ヨサムと汀は、象の鎖帷子を取り外した。身が軽くなった象は喜びの声を発した。象と二人は先を進む。下方から追手の叫び声が近づいてくる。象が腰を屈めた。背に乗れという仕草。再び象の背に乗るヨサムと汀。するといきなり象が走り出した。まるで二人を守るかのように、峠を力強く登ってゆく。象の苦しい息遣いが、背に乗る二人にも伝わる。だが、只の巨象ではなかった。神象である。とうとう追手を振り切って峠を越え、まだまだ先を目掛けて進む。一昼、一夜、逃げ続けたその前方に、大きな、大きな、雄大なる山が、聳え立っていた。
広い、広い、裾野。万年雪を戴く大山の麓には、鬱蒼とした森林、樹海が果てしなく広がっていた。
ヨサムが声を上げた。
「故郷だ。故郷だ」
汀も前方を見る。ヨサムが山を指差して、また叫んだ。
「戴雪（キリマン）の霊山（ジャロ）」
白象も大きな声を上げた。
霊山の麓に、延々と広がる樹海。それに向かって進み、漸くたどり着いた象、ヨサム、汀。意を決した二人は象と共に樹海に分け入り、やがてその姿は、見えなくなっていった。

完